

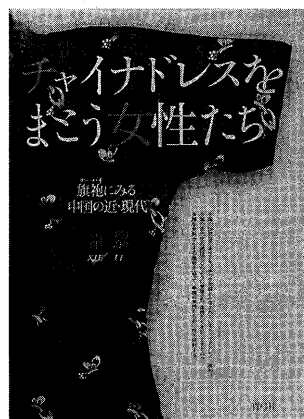
## 新刊紹介

謝 黎著

『チャイナドレスをまとう女性たち』

旗袍にみる中国の近・現代

田 畑 久 夫



2004年9月18日発行  
青弓社  
A5判 224頁  
定額 4,000円+税

我々日本人の伝統的な衣服といえは着物すなわ

ち和服であるといえる。著者謝黎さんは中華人民

共和国第一の人口を有する上海市出身である。来

日して日本の大学で「異文化の理解」という講義

を受講した。その講義の中で、インドネシアの民

族衣装であるバティックに出会った。そのとき、

和服のように、中国の民族衣装（特に女性）は本

当に「旗袍」なのだろうか、という疑問にぶつかった。

なぜなら、多くの外国人が理解しているように、

著者によれば、この二面性は「旗袍の原型は満

洲王朝の「旗人」の服に由来するものであり、

（中略）：清朝と中華民国ないしは中華人民共和

国を連続的なものととらえることができないにも

かわらず、清朝期に「民族服」として存在した

旗袍が現代中国の「伝統服」として位置づけられ、

観光対象となっているのが、旗袍をめぐる「伝統

の虚構性なのである」（8頁）という。

著者はこの「伝統」の虚構性を本書の主要な論

点の一つにあてているが、かかる意味の「伝統」

とは、文化人類学者エリック・ホブズボウムとテ

レンス・レンジャーの共著『創られた伝統』（前

川啓治・梶原景昭他訳、紀伊國屋書店一九九二年）の

中で論じられた「伝統」と「近代」の関係をめぐ

る問題でもある。すなわち、我々が「伝統」と呼

んでいるものの多くは太古から続いてきたもので

はなく、「近代」の「発明」として存在している

という立場から、旗袍の歴史的な形成に関して展

開するという大変意欲的な著作といえる。その分

析・考察の資料としては、多数の中国語文献は勿

論のこと、わが国においてはきわめて閲覧するこ

とが困難である『申報』、『良友』、『中国青年』な

どの新聞や雑誌などが用いられている。なお、著

者の旗袍研究は上海市に限定されているが、「中

国という広大で「民族」交流の複雑な地域を研究

するにあたっては、地域的限定は不可欠」（22頁）

と考えているからである。

さて本書は次のような構成になっている。

序章 旗袍研究の意義

第1章 清朝末・民国初期の婦女の旗袍

第2章 民国中・後期における旗袍の流行

第3章 文化大革命と改革開放による旗袍の否

定と肯定

終章 近・現代中国の服飾における「伝統」

の創造

序章では、上述したような論点を明確にした問

題の所在、先行業績を批判的に援用しつつ、人類

学的手法によって清朝末期から現代までの女性と

旗袍との関連や社会構造の解明を主目的とした本

研究の視点、および本書の構成と用語の説明の三

項目で構成され、著者の主張する観点が具体的

つ詳細に述べられている。

旗袍には、伝統的には男性の官吏が着用した礼服の朝袍や蟒袍、日常着用する常服袍なども含まれていた。これに対して女性に限られるようになったのを新型旗袍と称するが、かような新型旗袍成立以前の清朝末期から民国初期にかけての社会的背景や女性像を中心に論を展開したのが第1章である。当時、上海市は租界が開設されていたことで西洋文化が流入したり、太平天国の乱が勃発し、多数の移住者が増加するなどして「近代」的な産業都市に成長した。その結果上海市では「奇装異服」や「妖服」が生み出され、服飾を通して古い「伝統」の脱却をはかろうとしていたことを論証することに主眼がおかれている。

第2章では、この期に登場した新型旗袍のプロセスを都市的な社会環境の整備や新都市女性の成立などに関連づけて、豊富な新聞や雑誌資料を用いて詳細に論じている。その中で、西洋文化への関心が旗袍の「民族服」としての性格を変容させ、西洋的なドレスに近い新型旗袍の成立に導いたことを、ファッション形成に関する理論モデルを多用しつつ、主張している。

第3章は大きく二区分できる。すなわち、その第一は中華人民共和国建国から文化大革命にかけての時期、その第二は改革開放から現在に至るまでの時期である。前者では旗袍が排除され、後者では旗袍が「伝統服」として再評価された。本章

ではかかるプロセスを政治や経済を主体とした社会的背景の中で豊富な資料を提示し、具体的に述べている。なお、第1章から第3章までのいわゆる本書の核心的な部分に関しては、社会構造、女性、服飾という三つのテーマをキーワードとして、服飾をめぐる社会変動を明らかにしようとした(17頁、と論じている。

続く終章は本書のまとめに相当する章である。本章では「伝統」概念を性格づける「近代——民族」という視点、および「伝統」が適用される場としての「国内——国際」という二つの視点(軸)に基づいて、「近代」中国服飾史における旗袍を事例とした「伝統」概念の整理および説明が試みられる。

以上簡単に本書の内容を各章ごとに順を追って紹介した。本書の書名のみをみただけでは、チャイナドレスすなわち旗袍に関するファッション史のような印象を与える。しかしながら、内容は旗袍を事例とした「近代」中国の服飾史における「伝統」の意味を歴史人類学的視点で、中国の女性たちの心性を照射しようとする高度な理論的な著作となっている。かような高度な内容となって結実したのは、本学大学院生活機構研究科に平成15年10月に提出した博士学位請求論文「服飾からみた近・現代上海における〈伝統〉の操作——旗袍をまとう女性たち——」を骨子とし、それに一部加筆・修正を加えたものであるからであるとい

える。

このように本書は、非常に高度な内容を有した研究書であると位置づけることができる。

しかし、筆者は、最後の結論部分で展開する第一の軸「近代——民族」に関連して、近代は上海市に西洋化された外来文化が導入され、広まっていった時期だとし、具体的には民国中・後期を想定している。確かに、旗袍に関しては著者も本書中において力説されている如く、上海市では民国中・後期に西洋化し、「伝統」としての旗袍が再構成されたことは納得できる。だが、そのように同時期に「伝統」より脱却して西洋化したのは旗袍などの特定のものだけに限定されるのではないだろうか。同時期に上海市においてすべての「伝統」的なものが否定され、西洋化されたとはいえないのではないか。むしろかように多くの「伝統」的なものが西洋化されてくるのは、著者のいう改革開放期以降ではないのか。すなわち旗袍は例外的に早期に著者のいう西洋化された事例ではないだろうか。旗袍以外にかかる点にまったく触れられなかったことを残念に思う。

とはいうものの、本書は中国服装史研究のみならず、歴史人類学的著作としても、高い評価が与えられよう。服装史、歴史人類学さらには筆者もその一人であるアノール学派の歴史学に興味・関心をもつ読者に広くすすめたい。

(たばた ひさお 歴史文化学科)